



考え、学び、創造する女性たち

今年3月、三井化学株式会社グループ有志社員の皆様とコラボイベントとして「インクルージョン勉強会×ちびっとワンコイン^{(*)1}～国際女性デーに寄せて～」のオンライン開催に参加し、「子どもの虐待ホットライン」での相談状況について対談形式でお話しました。担当の女性社員の方々には、たびたびのオンラインやメールでの打ち合わせで大変お世話になりましたが、所属を越えて一つの社会課題を取り上げ、企画として実現されていく姿に頼もしさを感じました。

こうした企業の方々の取り組みだけでなく、昨年度は、子ども虐待を考える女子小中高生の皆さんとの出会いに多くの刺激をいただいた一年でした。

まず昨年10月には大阪市内の中学生からの手紙を契機に、彼女たちの『卒業レポート』制作に協力するオンライン意見交換会をしました。5名の生徒さんと担当教諭そして協会理事や子ども支援事業のスタッフ3名が参加し60分に及ぶ交流の場になりました。「子どもの虐待防止」というテーマを自ら設定して書籍やWEB検索で学びを深めたとのこと。浮かび上がる疑問点について当協会ホームページを検索し手紙で質問したり資料を請求されるなどのプロセスを経たのちの交流会でしたので、関わられたことをとても嬉しく感じました。

年が改まり、リニューアルしたホームページを介し小学6年生からメールが届きました。そこには、授業の一環で様々な社会課題の中から各自がテーマを決めて学びを深め、その解決に向けた校内のCM制作に取り組んでいること、自分は子ども虐待に関心を持ち、ホームページで協会のことを知りオンラインインタビューに協力してほしいことなどが、しっかりした文章で綴られていました。当日担当教諭と一緒に画面に現れた彼女は、こちらの話を熱心にメモし、その成果は子ども虐待防止の学内CMとして後日動画にまとめられました。その学びとスキルに感動しました。

しばらくして社会課題解決のためのアプリ制作プロジェクト^{(*)2}のメンバーである高校生から問い合わせを受けました。当初は、子ども虐待防止という重い課題と“アプリ”という軽やかな響きとのギャップをなかなか埋められず戸惑いましたが、サポート団体の方とやりとりを重ねてオンラインインタビューに協力することとなりました。

彼女たちの願いは、虐待を受けている子が助けを求められる環境をつくることで、話によると、周囲に虐待されているのではないかと気になる子どもがいたことや、虐待を受けていた人から話を聞いたことなど、彼女たちなりに実体験をベースに取り組む姿勢が伝わってきました。後日、国内コンペティションの最終10グループに選ばれたとの報告を受けました。

ジェンダー平等社会の実現と言われて久しい今日にあっても、いまだその完全な実現には程遠い社会状況があり、私たちが取り組む子ども虐待とも深い関連を持っています。そんな状況だからこそ、社会課題を見つめる次世代、特に女性が育っていることをとても強く感じています。

(川本 典子)

(*)1 三井化学ちびっとワンコイン:三井化学株式会社グループ有志社員による給料や賞与からの積み立て寄付基金のことで当協会もご支援を受けました。

(*)2 次代を担う女性IT起業家の育成を目的とした米国の非営利団体「Technovation」主催のコンテスト。身近な社会課題を解決するアプリとビジネスプランの制作を通して、プログラミングや起業家精神を学ぶことを目的としています。日本では一般財団法人WaffleがJapan Chapter(日本支部)代表として学生の支援を行なっています。

